

弔詞

吉岡英二

私が瀬戸臨海実験所の大学院生だったとき、国内の雑誌に一報の論文を投稿した。それは、なんら実験的な裏付けもなく「種分化」の経過について論じたものだったが、雑誌の編集方針に適っていたのか、原稿は若干の改稿を求められた後に掲載された。まだ3-4報目の業績だった。誇らしさと気恥ずかしさの入り混じったその別刷りを、教官と何人かの先輩たちには渡したが、大垣さんには渡せずにいた。

陽の落ちかけた実験所2階の院生の大部屋で、大垣さんと二人きりのときに「吉岡、あの論文の別刷りをもらえないか」と声をかけられ、私はひどく緊張した。私にとっては、大垣さんは徹底したデータ主義で一般性より個別性を重視した迫力あるゼミ発表をする恐い先輩だった。何のデータもなく進化について議論した私の論文が、大垣さんの歓心を買うとは思えなかったので、論文を少し自虐的に形容して渡した。しばらくして大垣さんから、「こういうケースはどう考えたらいいのか？」という種分化についての具体的な事例を踏まえた質問を受けた。大垣さんはその論文を真剣に読んでくれていて、さらにそれについて意欲的に考えてくれていたようだった。それから、大垣さんから厳しい質問を受けることはあったが、意欲を殺ぐようなやりとりは一度もなかった。研究面でも後輩に対しても、つねにストイックで誠実なスタイルを貫いておられた。

私が、野外でヒザラガイの卵を経時的に採集しようと考えていたとき、大垣さんから真鍮でできたプランクトンネットの枠を渡された。大垣さんがアラレタマキビの卵の採集に使っていたもので、自分は使わなくなったので私の研究に使えるならということでヒザラガイの卵に合ったネットを張って使わせてもらった。自分の研究に使った手作りの道具には多くの思いでも詰まっていると思うのだが、その後大垣さんが臨海実験所を出るときにそのまま譲ってもらった。その枠は堅牢で狂いがなく、その後の私のヒザラガイの産卵データはすべてそれにネットを張ったもので取った。その後もネットの生地は何度も張り替えたがその枠はいまだに何の狂いもなく生地を支えている。

大垣さんとは瀬戸臨海実験所の院生としてそのほとんどの時期をともに過ごした。このたび訃報に接し、よみがえる大垣さんのイメージは50ccのヤマハメイトで瀬戸のアパートから実験所に通う姿で、交わす言葉は少なくともいつも静かに見守っていただいていたことが思い出される。労をいとわず常に厳しい道を進もうとする姿勢のまま逝かれてしまっ

た。

(よしおか えいじ・神戸山手大学)